

## 追悼

### 堀川慶治代表を偲ぶ

編集部



「シネマ游人」代表の堀川慶治が3月2日に亡くなった(享年68歳)。家族によると、昨年(2018年)の夏に胆管にガンが見つかり、すでにステージ4の末期症状で手の施しようがなかったとのことである。

慧眼鋭く、小誌の編集には欠かせない存在で、誰もが一目置く存在だった。大学卒業時、黒澤明の『生きる』に出会って、内定していた東京の大手メーカーの就職を断わり、親のいる地元の公務員になったと聞いている。その家族愛はゆるぎないものがあり、何をおいても家族ファーストの人だった。一方では、半端でない反骨精神の持ち主で、戦前回帰の現政権に対しては、一家言持ち、強い危惧をいだいていた。

まだまだ、小誌のけん引役としてやってもらいたかっただけに、早すぎる死はスタッフ一同無念でならない。ここに故人の冥福を祈るとともに、生前に交友のあった方々に彼の人となり語っていただき、追悼としたい。



堀川代表を励ます会(2018. 11)

## 浅春に友を送る

伊藤三男 四日市再生「公害市民塾」

五歳も年下の友の死は、やはり辛いものがある。半年以上に及ぶ闘病のことも知らず、それは突然の訃報だった。葬儀の挨拶で遺族を代表したご長男は、死に向き合った父親の姿を「泰然としていた」と語ってくれた。父は「俺はガンとは闘わない」と宣言して末期を生き抜いたという。

さらにご長男は家庭における彼の姿を、とても丁寧に映し出してくれた。家族愛に満ちた彼の日々は、一見「無頼」を装う酒席の場などでは見せぬ優しさに満ちていた。いい父親だったんだなと感銘深かった。

彼と出会ったのはざっと四十五年も昔のことだ。当時「四日市公害と戦う市民兵の会」にいた私は、実はお連れ合いのまり子さんと先に知り合っていた。彼女が四日市市役所に就職して間もなく「同僚に面白い人がいる」と言っ、例会に連れてきたのが彼、堀川慶治君だった。七〇年代半ばの頃である。

追々話を聞いていくと大学時代は自治会の役員で、労働運動にも関わりを持ち、東北の金属系企業の労働争議を支援し

ているのだという。「それでよく市役所に入れたなあ」と私たちは茶化したりのだが、その頃の一途さは官職を全うしながら、終生変わることはなかった。披露された弔電の中に「大学時代ともに闘った仲間」との文言もあった。

公吏というのが彼に似合ったかどうかは分からないが、職員組合の任務を担ったり最後の職場が「人権室」であったのは、彼らしい道のりだったのだと思う。しかし、人の生き様は一面だけで計れるものではない。強い仲間がいればこそ、敵の存在もまた避けることはできなかったはずだ。

元気な彼と最後に会ったのは、昨年三月「さようなら原発」の集会だった。また一年経って「3・11」は八年目を迎える。ともに隊列を組めないのは悔しいが、原発や公害を成敗する道はまだ先が長いのだから、彼の霊とともにしばらくは歩き続けることになるのだろう。冥福を祈るばかりである。

## 心やさしき叛<sup>はん</sup>の人

藤本幸久 ドキュメンタリー映画監督

四日市や名古屋で上映があると、いつものように四日市の夜の街をさまよった。案内は堀川さん。行き着く先はいくつかあったが、どの店も地元の人が切り盛りしている小さな酒場だった。途中、全国チェーンの店が新しくできていると、歩きながら嘆くこと、しばし。

青春の頃、四日市の公害の時代を生きて来た私たちには共通の思いがある。青い海や白砂青松の浜、れんげや菜の花が鮮やかな田んぼを東京の大企業に奪われ、公害の町とされたことへの深い怒り。住民を犠牲にする国策は、断じて受け入れない叛の思いだ。堀川さんも若い頃の思いを、いつも胸底に持ち続けていると感じていた。だから、地元の小さな店なのだ。

したたかに酔って、夢見るのは、私たちが私たちとして生きていける、私たちの風土。市役所生活の末期、堀川さんが考えていた四日市の映画祭もそのひとつだったのだと思う。今ある日本の映画祭は、映画を消費するだけの映画祭だ。どんな映画祭なら、自分たちの映画祭となるのか。退職後、

私たちが北海道で開催している小さな映画祭を再三訪ねてくれたのも、「私たちの映画祭」を考え続けていたからだと思う。いつあっても堀川さんの声は、おだやかでやさしい。しかし、話し込むと、肚に叛の思いを研ぎすませている堀川さんがいた。この世で別れることになって、「心やさしき叛の人」との思いが、ますます強くなっている。

## 堀川慶治君の思い出

高木紳一郎 大学時代の友人

「堀川慶治君が3月2日に病で亡くなった」とご子息から電話を頂いた。正月いつも交換している年賀状が来ず、どうしたのかなと思っていたが、突然の連絡には驚いた。

堀川君とは大学を同じくしている。私は、昭和42年（1967年）横浜国立大学経営学部に入學、その2年後に堀川君が同じ学部に入ってきた。

昭和40年代の大学を取り巻く情勢は現在とかなり異なっている。日本は敗戦後の混乱を漸く脱し高度成長を迎えてい

た時期であったが、社会はまだ貧しかった。東西冷戦が激しく、中でもベトナム戦争の暗い影が広く社会全体を覆っていた。世界的に反戦平和運動が起こり、若者が立ち上がった時代である。

横浜国立大学も大学闘争の真ただ中にあった。堀川君の入学後暫くは講義も行われていたと思うが、その後、学生ストライキからバリケード封鎖へと進んでいった。横浜国立大学全学共闘会議の一員として行動するうち、堀川君と次第に親しくなっていく。堀川君は真っ直ぐな性格で、社会の矛盾や差別不平等に強い怒りを持ち、平和と社会正義を求めていたと思う。独特の感性を持っており、映画や演劇、時には歌謡曲についての感性豊かな批評に驚かされたことがある。

大学を出た後は、故郷四日市に帰り四日市市役所に勤められた。何度かお会いし旧交を温める機会もあったが、毎年頂く年賀状にはその時折の消息が記されていた。数年前、大学で共に戦った人達が数十年ぶりに集まる会合があったが、その時にお会いしたのが最後となった。その席で、海外に留学されたご子息のことを嬉しそうに話していた顔が忘れられ

ない。

家族を愛し、廻りの人々に対し優しい人だった。ご子息からは、最後はご自宅で愛するご家族に見守られながら息を引き取りましたと窺った。時代に真摯に向き合い、時代と格闘しながら誠実に生きた、生きようとした一人の人間を失ったことが残念でならない。

安らかにお眠り下さい。合掌。



## 旧友との再会と別れ

柳川平和 弥な屋オーナー

「こんにちは 柳川君いる？」

堀川君と何十年ぶりに会った第一声だ。最初はだれかわからない。顔に見覚えはあるが…、だれかわからない。

話をしている、やっと思いつ出した。四十数年前に、映画監督藤田敏八(四日市出身)の『八月の濡れた砂』の上映会と一緒にやった堀川君や！

彼の話によると義理の兄貴の長田紀生氏が監督・脚本を書いたベトナムを舞台にした映画がお蔵入りしていたけど、それを今回四日市で上映する。については上映会の手伝いをしてくれないかとのことだった。なんで私に白羽の矢が立ったかわからないけど、せっかく頼ってきてくれたのだからと引き受けた。私の店(弥な屋)で前売り券の販売をして、当日は会場作りから手伝った。

映画は戦争末期の南ベトナムが舞台で、まだまだ生々しい状況の現場が映し出されていた。主演は川津祐介。現地人を殺してしまった川津が逃げながら最後は海にやってくる…。

内容はあまり思い出せないが、重く考えさせられた感はある。堀川君は、飄々としながらも映画の上映については情熱を燃やしていた。それがヒシヒシと伝わってくる。身内の作った映画を何とか日の目を見させてメジャーにしたいという強い思いを感じた。

今回は『8月の濡れた砂』の上映会をするという。忙しくてほとんど名前だけのお手伝いだったが、その時に彼にあったのが最後になった。

まさか次に彼の名前を聞くのが訃報の連絡とは思っていなかった。また店に来そうなのがする。

「柳川君いる？」 堀川君のご冥福をお祈りします。 合掌。



## ブルーウイスキーの思い出

田中継志 津高同窓生

堀川さんのあまりにも早い御逝去に驚いています。彼は私の高校時代の同級生で、3年間同じエレキギターグループで活動していました。一緒に演奏していたあの頃の彼の様子が鮮明に蘇ってきます。

私は中学校の時にもエレキバンドを組んでいたこともあり、高校でもそのようなクラブを探していました。そのうちブルーウイスキー（青ひげ）というエレキバンドがあること、それが各学年毎にあることを知りました。どういった経緯でメンバーになったのかは、はっきりとは覚えていないのですが、4人のメンバーで1年生のブルーウイスキーを組むことになりました。その中で堀川さんはベースギター、私はリードギター、他のメンバーはサイドギター、ドラムでした。

高校の文化祭が演奏の場で、私たちのバンドは主にザ・ベンチャーズのパイプラインやダイヤモンドヘッドを演奏していました。その時はかなり多くの生徒が見に来てくれたこ

とを覚えています。

卒業後何十年かしてこのブルーウイスキーの復活の場が2回ありましたが、オリジナルの4人のメンバーで演奏することは難しく、堀川さんと私以外の2名は応援を頼みました。卒業後にまた堀川さんと同じ舞台上で演奏できたこととても嬉しく思っています。大切な思い出です。

ご冥福をお祈り申し上げます。

